

令和3年産 第一回米等の作付意向結果について

主食用米増産意向はゼロ 飼料用米が増産か？

農水省は都道府県別の主食用米等の生産者作付意向調査結果を発表している。この調査結果は肥料をはじめ農薬等の生産資材を販売するメーカーや農業生産資材の卸商にとっても重要な関心事となっている。さて、気になる第1回目の聞き取り状況の結果だが、前年と比較して主食用米を増産する傾向にあると答えた都道府県はゼロとなった。コロナ禍で業務用米の販売が減少しているために流通在庫増となっている情報が生産者まで行きわたっているからだ。2回目の緊急事態宣言が解除後もコロナ禍は暫く続き業務用米の需要が元通りにまで回復する事は難しいであろうという事と、令和3年産が凶作でない限りは主食用米の米価が好転しない事、売れたとしても生産者からの手離れが遅くなり生産者は直ぐに現金化が出来ない事が予想されるため生産者は主食用米の生産を回避する意向が現れた。特に県外輸出量が多い米どころの福島を除く東北5県や北陸4県、関東でも比較的米生産高が高い千葉や栃木県が主食用米の作付減を検討している意向調査結果となっている。過去にもこのように流通在庫が多く米価下落局面が強い年回りについては備蓄米生産にシフトする傾向が強かった。ただ、備蓄米は抱えられる量も限りがあるため、過去の取組実績による優先枠と入札単価もあることから、東北6県の生産者意向は備蓄米にシフトする動きは傾向としてそれほど強くないようだ。東北6県の動きとして、戦略作物への生産シフトが見られる。その中でも加工用米、飼料用米、WCS用稲への転作が見込まれている。加工用米や輸出用米等の新市場開拓用米については北海道や東北全県において取組増加の傾向が見られている。これは令和2年度第3次補正予算にて打ち出された10a当たり5千円増額の産地交付金が要因していると考えられる。輸出用米はまだまだ分母が小さい事と全世界においてもコロナ禍であるため相手のお国事情もある事。なので、主食用米からの転作解消の打開策とまでにはつながらないだろう。加工用米においては主な需要先はうるち

| 用途の種類 | 増産傾向 | 前年並み | 減少傾向 |
|---------|------|------|------|
| 主食用米 | 0 | 28 | 19 |
| 加工用米 | 18 | 17 | 9 |
| 新市場開拓用米 | 19 | 9 | 10 |
| 米粉用米 | 17 | 22 | 6 |
| 飼料用米 | 31 | 9 | 5 |
| WCS用稲 | 13 | 25 | 6 |
| 麦 | 13 | 22 | 10 |
| 大豆 | 15 | 23 | 7 |
| 備蓄米 | 10 | 12 | 12 |

数字は都道府県の数

米が清酒・加工米飯・米菓・味噌、焼酎等が、もち米は米菓と包装餅が主な需要者になっている。取扱業者は全農、全集連の全国流通業者と商社や大手卸、原料米取扱業者といった地域流通業者に分けられるが昨今は地域流通業者の扱いが急速に増えているようで、令和2年産米の契約状況を数社聞いてみるといずれも苦戦しているという返事が返って来た。特に清酒の方では業務用での需要減により令和2年産も使い切れず間に合っているという声も聞く。また、需要者側が求める価格と産地側の希望販売価格が乖離しているというような声もあった。加工用米も近年伸びている冷凍米飯やパックご飯でも価格競争が激しくなっていてきており、収益率は低下してきているという。こういう状況の中でまだ国内において需要に供給が追いついてない販路としては飼料用米がある。今年度は飼料用米に取り組んだ生産者が仮に気象災害により減収に見舞われた場合でも10a当たり基準交付金の8万円は補助金を受け取れる取組しやすい仕組みが構築されている。今年は本当にどういう出来秋となるのか誰もが分からない所なのだが、どのような用途米を生産したら収益におけるダメージが少なく済むのか、生産者にとって悩ましい年となっている。今後も生産者の意向調査についてはアップデートがあり次第、情報発信していきたい。

「令和」ゆかいの地～太宰府～

福岡の神社といえば、「学問の神様」として知られている菅原道真公をお祀りする太宰府天満宮が有名で受験シーズンには多くの人を訪れる。また宝満宮竈門神社も近年では「鬼滅の刃」の発祥の地・聖地として有名なものをご存じだろうか。主人公の炭次郎や禰豆子の苗字と同じ「竈門」が神社名であり、大宰府政庁の鬼門除けとしてお祀りされたと言われている。その近くに「令和」になってから有名な神社があると聞いて訪ねた。それは「令和」の引用元の万葉集の歌が詠まれたとされる福岡県大宰府政庁跡にある坂本八幡宮。奈良時代を代表する歌人のひとり大伴旅人。大化の改新から20年後の665年に生まれ、飛鳥時代から奈良時代にかけて活躍し、最高位の大納言まで昇進した人物である。また代々、天皇家直属の軍事氏族として仕え、728年には大宰帥（だざいのそち・大宰府の長官）として赴任している。この人事は藤原氏による一種の左遷人事だったとも、軍事的能力に期待されていまだ反乱の余波が残る九州を抑えるためだったともいわれている。大伴旅人は邸宅に役人らを招き、梅の花を題材にした歌会「梅花の宴」を開いた。そこで詠まれた三十二首の序文「初春の令月にして気淑く風和ぎ」から「令和」が新元号に選ばれた。歌が詠まれた「梅花の宴」は、大宰帥に就任した大伴旅人が山上憶良など役人を招いて、当時、中国から渡来した高貴な「梅」をテーマに歌を詠んだことから「梅花の宴」と呼ばれている。梅花の宴で詠まれた三十二首の歌の序文に「令」「和」という言葉が出てくる。序文を書いたのも旅人といわれている。「時に、初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を抜き、蘭は珮後の香を薫ず」現代語訳は、「時は初春のよい月であり、空気は美しく、風は和やかで、梅は鏡の前で美人が白粉で装うように花咲き、蘭は身を飾る衣に纏わせる香のように薫らせる。」となり、春の訪れを喜ぶ気持ちが込められている内容であり、「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味が込められた元号となっている。あまり重要な人物として扱われていない大伴旅人ですが、熱心なファンもいる。その理由は、かなりのお酒好きとして知られており、「万葉集」には大伴旅人が詠んだお酒にまつわる歌が収められている。「験なきものを思はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし」意味は、「くよくよと思ひ悩むくらいなら、酒を飲んだ方がいい」思わず頷いてしまうような内容である。また「世の中の遊びの道にすすしくは酔泣するにあるべくあるらし」風流な遊びをするよりも、酔って泣いている方がましとお酒が大好きな大伴旅人の考えである。「梅花の歌」三十二首のうち11首は、市内の大宰府政庁跡を含め各所に歌碑が作られている。大宰府政庁跡は、7世紀後半から奈良・平安時代を通じて約500年間、九州全体を治める役所「大宰府」が置かれた場所。「都府楼跡」の名前でも親しまれているようだ。当時は、国の西の守りとしての防衛拠点や外国との交渉の窓口としての役目もあった。政庁跡には礎石が多く残り、当時の大きさが感じられる。大宰府政庁の役人であった大伴旅人の邸宅が近くにあり「令和」の典拠となった「梅花の歌」を詠んだという意味では、大宰府政庁跡も令和ゆかいの観光スポットである。コロナ禍でゆっくり観光にも行くことが出来ない時ではあるが、早くコロナが収束し旅行や観光等に行けるようになることを待つばかりである。（「だざいふ」の大と太、律令制下の役所を指す場合は「大宰府」と「大」を用い、現在の行政名「太宰府市」や「太宰府天満宮」には「太」を用いています。）（福岡支店）



東日本大震災から10年になります。先日福島県沖で発生した地震はこの余震とみられますが、地震の恐怖を改めて感じました。防災への備え、備蓄品の再確認、皆さんもしてみてください。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>